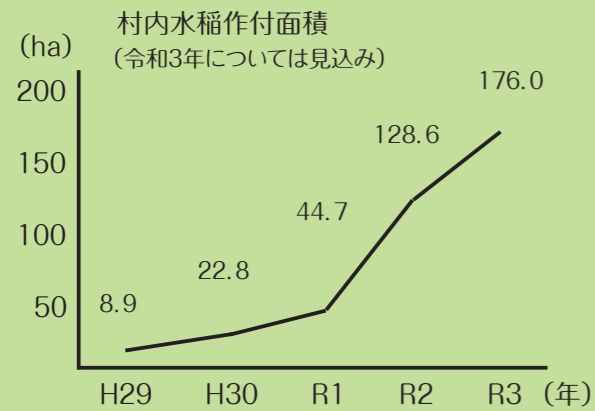


水田農業の再生に向けて

東日本大震災の前年、平成22年の村の水稲作付面積は約693haでした。平成23年春に原発事故の影響で作付けができなくなりましたが、平成24年からは、除染後の営農再開に向けて、国・県の実証事業に村民と共に取り組みました。避難指示が一部を除き解除された平成29年からは作付けを再開。年々その面積が増加しています。現在、農地中間管理事業などを通して農地の集積が進められていて、ホールクローブサイレージ(WCS)や飼料用米の作付けも伸びています。



品目	面積 (ha)
主食用	57.7ha
WCS	48.8ha
飼料用	69.1ha
酒米	0.4ha
合計	176.0ha

〈施設概要〉

飯舘村ライスセンター(自動ラック式低温倉庫を含む)

鉄骨造2階建て
 建築面積1,993㎡ 延床面積2,941㎡
 事業主体 飯舘村
 運営主体 JAふくしま未来
 本体工事費 約17億円(うち再生加速化交付金約13億円)
 総処理量 1万6,000俵(水稲作付面積200ha)



荷受け設備/貯留乾燥設備/乾燥設備/糶摺調整設備/計量出荷設備/自主検査設備/自動ラック式低温倉庫

稲作農家の声



高橋 松一 さん
(二枚橋・須萱)

「おいしい」の声がやっぱりうれしいね

5年目の今年は約8haに作付け予定。食用米は2.5haでそのうち0.33haはもち米。残りの5.5haではWCS用の米を栽培します。「道の駅では直売所での販売の他レストランでも使用されています。おいしいと言われるとやっぱりうれしいね」。



青田 豊実 さん
(前田)

集落営農で地域を守り次の世代につなぎたい

地域の農地を集積し、集落営農を行っています。米づくりは昨年の約15haから21haに。そのうち食用米は約7haで残りは飼料用米を作ります。「一緒に取り組む人と楽しみつつ、地域を守り、次の人達につないでいきたいですね」。

黄金色の稲穂が一面に揺れる 飯舘村の秋景色を取り戻したい



川井 智洋 さん
JAふくしま未来 飯舘営農センター長

震災前は村内に5つのライスセンターがあり、そのうち2つがJAの施設でした。震災後はそれぞれ老朽化が進み使用ができなかったため、JAで集荷した分は南相馬市の施設へ運んでいました。個人で、機械を持つ方の所に依頼し収穫後の処理を行っていた方も、それぞれの収量が増加するに従い処理が追いつかなくなるのではと懸念されていました。完成した施設を、ぜひ活用していただきたいと思います。秋になれば村一面に黄金色の稲田が広がる—その景色をまた見たいですね。



水田農業の新たな拠点が完成 飯舘村ライスセンター



自動ラック式低温倉庫。1tの米袋を自動収容します



署名した協定書を手を。杉岡村長(左)と数又組合長

完成引渡式を行いました

「飯舘村ライスセンター」と併設の「自動ラック式低温倉庫」が完成し、4月15日、村とJAふくしま未来が、完成引渡式を行いました。

施設内で行われた式には、関係者と来賓が出席。杉岡村長とJAふくしま未来の数又清市代表理事組合長が、電動シャッターのボタンを押し、列席者に施設が公開されました。また、協定書に署名を交わし、村の基幹産業である農業の復興・振興等に向け、強力に連携を図ることを確認しました。

このライスセンターは、米の乾燥・糶摺選別計量等に使用する大型機器を備え、自動ラック式低温倉庫は、4基のクレーン等を使って米の袋を自動で倉庫内の棚(ラック)に収容することができます。

式のあいさつで、杉岡村長は、「ふるさとの担い手と共に進んでいきたい」と農業振興への思いを語り、数又組合長は、「末永く村と力を合わせていきたい」と協定への期待を述べました。

この新施設は、農地の集積や基盤整備が進む村内で、水田農業の中核となる施設として、今後の活用が期待されます。